

社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働による人類進化理論の新開拓

第 3 回若者研究会

1. 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です

Copyrighted materials of the authors

2. 研究会基本情報

日時： 2021 年 6 月 6 日 (日) 13:00～16:40

場所： オンライン会議

テーマ： 「配偶形態・婚姻形態・社会組織・親族関係」について

報告者：

1) 川添達朗 (東京外大 AA 研)

レビュー「社会組織、社会構造、母系/父系、分散」

研究発表「ニホンザルのオスの行動から探る集団の境界」

2) 河合文 (東京外大 AA 研)

レビュー「親族関係、出自、母系/父系、親族名称」

研究発表「マレーシア半島部クアラ・コにおけるバテツの「養子」の実態：親族関係
にかんする予備的考察」

3) 田所聖志 (東洋大)

レビュー「結婚、夫婦、家族」

研究発表「パプアニューギニア農耕民における天然ガス開発と結婚形態の変化」

3. 発表内容 (要旨および質疑応答)

3-1) 霊長類学：社会組織、社会構造、母系/父系、分散

(川添達朗)

レビューの要旨：

「霊長類の社会組織・配偶形態・社会構造」

本発表では、霊長類学と人類学の学際的な協働に向けて、相互理解を促進するため、霊長類学において社会を考えるうえで基本的な概念となる、社会組織 social organization、配偶

形態 mating system、社会構造 social structure について、Kappeler & van Schaik (2002)や Kappeler (2019) による論考をもとにレビューする。

社会組織は、ある霊長類種の生活単位となる単位集団が、単独であるか複数頭であるかといった集団サイズと、性年齢の集団構成、集団から分散する性によって特徴づけられる。複数頭で構成される単位集団には、雌雄の頭数によって、ペア、単雄複雌、複雄単雌、複雄複雌の 4 つの型がみられる。霊長類を含む哺乳類の多くで、雌雄どちらか、もしくは両方の性が集団から分散する。集団にメスが残りオスが分散する母系 matrilineal、逆にオスが残りメスが分散する父系 patrilineal、両方の性が分散する双系 bilineal に分類できる。集団の継承性という点において、分散もまた社会組織を類型化する大きな要素である。これら母系/父系という用語は人類学とも共通のものであるが、霊長類学においては、出自や財の継承を意味するわけではない点には留意すべきである。

配偶形態は交尾のパターンによって、単婚 monogamy、一夫多妻 polygyny、一妻多夫 polyandry、乱婚 promiscuity に類型化される。社会組織と配偶形態の間には関連がみられるが、単独でも乱婚がみられるなど、必ずしも社会組織によって配偶形態が決定するわけではない。

社会構造は、同じ個体間でみられる相互交渉の繰り返しとそのパターンとして定義される。個体間の相互交渉 interaction が繰り返されることで社会関係 social relationship が形成され、いくつものペアや集団を観察することによって、社会関係の総体として集団や種の社会構造 social structure が描かれるという階層的なモデル (Hinde 1976) が、霊長類を含む動物の行動を対象とした研究で広く受け入れられている。

霊長類の社会はこのような社会組織、配偶形態、社会構造によって特徴づけられるが、それらを決定する要因として、生態的要因を重視する仮説と、系統的要因を重視する視座がある。社会生態学モデル (e.g. van Schaik & van Hooff 1983) では、生息域の食物の量や分布などの利用可能性と捕食圧の強さによって、集団サイズや性構成といった社会組織、ひいては社会構造が決定されるという立場をとる。他方、系統的要因を重視する立場からは、近縁な系統では母系/父系といった社会組織や社会構造の類似性が認められることから、社会構造進化論 (伊谷 1987) に代表されるように、社会が系統的制約を受けると主張している。

レビューに関する質疑応答：

- 社会 (social system) の 4 要素 (社会組織、配偶形態、社会構造、育児形態) は並列の関係か。
→ 社会の 4 つの要素は、互いに関連している。例えば、社会組織と配偶形態は互いに大きく関連している。例) 社会組織が複雄複雌の場合には、配偶形態は乱婚型になりやすい。
- 同一種でも生態環境が異なれば社会構造が変わるのか。

→社会生態学モデルによれば、生態環境が変われば、社会構造だけでなく社会組織も変化する。

- 人類学とは異なり、霊長類学では、2 頭（ペア）の場合も「集団 (group)」という語を使用するのが、興味深いと感じた。
- van Schaik の社会生態学モデルは美しくて魅力的だった。最近でもこのモデルは評価され、事例研究で検証が試みられているのか。

→霊長類学ではたくさんの事例研究がある。現在でもモデルの検証と修正が行われている。

- アカゲザルは中東から上海あたりまで東西に広範に分布し、「生息地域によって『社会』が変わる」との説明だったが、生息地域により配偶形態も変わりうるか。

→現在調べられている範囲では、アカゲザルの配偶形態に種内変異はない。乱婚型である。

- ここでいう「社会」というのは、種社会と生息地域や行動圏に基づく社会（おそらく種社会の下位単位となりそう）を区別せずに考えているのか。

→種社会を検討する場合は 1 つの集団では検討が難しい。しかし、例えば、特定の地域のあるニホンザル集団について紹介しているはずが、ニホンザル全体を語るように聞こえるときがあるため、そこは気をつけていく必要がある。

- 社会システムを決定する要因として 1) 生態と 2) 系統の 2 点が挙げられるとのことだが、系統もまた、通時的観点から見た場合、祖先種が祖先環境に適応を試みた結果であるという点において、生態的要因も密接に関連しているのではないか。よって、1) と 2) は、どちらか一方がより強い要因とみなすというよりも、相互補完的な関係なのではないか。

→そのとおりだと思う。1) と 2) は排他的な考え方ではない。また、社会を構成する要素の中でも変化しにくい安定したものと、変異が大きい部分がある。それは、系統によって社会が大まかに決まり、生態的要因によってそれぞれの環境に適応していくということなのかもしれない。例えば、マカク属では、どのような環境でも乱婚型という配偶形態は変わらないが、群間関係は生息環境で変化しやすい。それらの相互作用についても考えていく必要がある。

研究発表の要旨：

「ニホンザルのオスの行動から探る集団の境界」

ニホンザルは複雄複雌の群れを形成し、メスが生涯群れに残りオスが群れを移籍する母系の社会を持つ。そのため、ニホンザルの社会構造についての研究の多くは、初期を除けば、メスを主な観察の対象としてきた。群れを離れたオスは、ハナレオスあるいは群れ外オスと呼ばれ、どの群れにも属していないとみなされる期間を過ごすことがある。このような状態

はニホンザルの生活史において異常な状態ではなく、多くの地域でその存在様態が確認されている。

純野生群の長期調査地の一つである宮城県金華山島に生息するニホンザルの群れの性比はメスに偏り、オスが少なくメスが多い性構成を持つことが知られている。そのような特徴からも予測されるように、多くのオスが群れ外オスとして生息している。群れ外オスは短期的に群れに接近し群れのメンバーと交渉を繰り返し、社会関係を築いていると考えられているが、その詳細についての観察は少なく、群れの境界をまたぐオス間の社会関係を明らかにすることは、ニホンザルの社会構造の理解に資すると考えられる。

ここまで、金華山のニホンザル、特にオスの社会について、発表前半で行ったレビューに即して述べてきた。ニホンザルが複雄複雌の群れを形成し、オスが群れから分散するのは間違いない。しかし、ニホンザル研究に一貫した群れオス/群れ外オスの定義はなく、それらが研究内で示されないことさえある。群れオス/群れ外オスの定義、ひいては、群れと群れの境界は、どのようにして観察可能になるのだろうか。本報告では、金華山に生息するニホンザルのオスの観察を通して、群れの存在、すなわち群れオスと群れ外オスの区分を前提とせずに、個体の空間的・社会的関係を明らかにすることで、群れの境界を描くことを試みる。

調査は宮城県金華山の北部に生息する、“C₂ 群”と呼ばれる群れの行動圏を含む一帯で実施した。調査域内で発見され個体識別されたオトナ・メス 8 頭と、オトナ・オス 11 頭を調査対象とした。個体追跡を行い、対象個体間での 5m 以内への近接、毛づくろい、威嚇を含む敵対的行動を記録した。これらの行動記録をもとに、空間的・社会的なまとまりを分析することによって、11 頭のオスが群れオスと群れ外オスに区別できる、すなわち、群れの境界を顕在化させることができると期待される。

11 頭の観察対象のオスのうち、特定の 3 頭 (*Ha*, *Rc*, *Kl*) はメスとの近接の程度が他のオス (*Ga*, *As*, *Mc*, *Mk*, *Rb*, *Th*, *Bl*, *Lt*, *Fr*) に比べて高く、メスと空間的なまとまりを維持していることが明らかになった。例えば、2008 年 6 月を例にとると、*Ha*, *Rc*, *Kl* の 3 頭は調査をした 26 日間すべてでメスと近接していることが確認された一方で、同時期に、他のオスは最も頻繁に観察されたオスでも 10 日間、*Lt* は 1 日だけしか観察されず、空間的なまとまり、すなわち凝集性に個体間で大きな違いがあった。毛づくろいの相手と頻度を分析することで社会的なまとまりの評価を試みた結果では、*Ha*, *Rc*, *Kl* の 3 頭だけがメスと毛づくろいをしていた。その他のオスたちは、メスとは毛づくろいをせず、オス同士での毛づくろいを互いに頻繁に繰り返していた。オス同士の敵対的な交渉からは、オス間に直接的な優劣関係がみられること、*Ha*, *Rc*, *Kl* の 3 頭は他のオスに比べ特に優位であった。毛づくろいと敵対的行動から社会的なまとまりを考えると、*Ha*, *Rc*, *Kl* の 3 頭がメスと親和的な社会関係を持ち他のオスに対し優位であるのに対し、他のオスはメスとの親和的な関係を持たず、オス同士で親和的な関係を築いていると言える。

以上の結果はいずれも、*Ha*, *Rc*, *Kl* とそれ以外のオスの間で、空間的、社会的に異なるまとまりがあることを示唆している。上記 3 頭はメスとの関わりを持ち、他のオスたちは

メスから空間的に離れてオス同士で親和的な社会関係を持っているといえる。これは、この 3 頭がメスとともに群れを形作り、他のオスたちは群れとは異なるオスだけの集団、オスグループをとしてのまとまりをもっていると解釈することができるだろう。

フィールドでの観察において、個体あるいは個体間の行動や状態を観察することはできるが、集団の境界を直接観察することはできない。サルたちの行動や状態を記録することによって、集団の境界を類推することが可能になると言える。このような試みは決して特別なものではなく、これまでに観察されていない種や群れの観察を始める時に、研究者の誰もが行うことである。集団や社会をあらかじめ規定するのではなく、観察や対象個体の実践を通してそれらを捉えようとする視点は、人類学と霊長類学の双方にとって重要なものではないだろうか。

研究発表に関する質疑応答：

- 近接を半径 5m に設定したのはなぜか
→一般的に、近接は半径 3m で定義されることが多い。私の調査地の宮城県金華山ではサルの群れの広がりから、半径 3 m より広げたほうがよいように感じたため半径 5m とした。

【一言感想】

- ・人類学と霊長類学における用語の使い方を検討したことで、「社会」を取り巻く用語の多くが共通に使われていること、一方でその多くが異なる意味を持っていることを確認できた。
- ・人類学において、地位や役割の捉え方として生得的なものと獲得的なものがある点は霊長類学との大きな違いとして指摘できると思う。霊長類学においても遺伝子決定論 (e.g. good gene 仮説) のような議論もあるが、基本的には地位や役割は生後の相互行為の蓄積によるものだという考え方が一般的であると思う。
- ・「養子」をめぐる事例のように、人々の実践を基に家族や親族関係を捉えなおそうという試みは、霊長類学の発想とも通じるものがあり、両分野でより詳細に検討することで、等質な議論が可能になるかもしれない。
- ・婚姻をめぐる形態が社会状況に応じて変化する点も、霊長類学の発想も交えた共同的な議論が可能かもしれない。例えば、婚資が必要である点は変わらないが、婚資の形態は変化するという点は、その社会における普遍的なものと環境に応じて変化する可塑的なものを明らかにすることができるかもしれない。この点を、霊長類学における社会構造進化論や社会生態学モデルとの比較ができないだろうか。

3-2) 人類学：親族関係、出自、母系/父系、親族名称

(河合文)

レビューの要旨：

「親族関係、出自、母系/父系、親族名称」

本発表では文化人類学における「親族」や「父系／母系」という語について Lavenda and Schultz (2020) *Core Concepts in Cultural Anthropology* の 7 章「Relatedness」1～5 項を参照に概説した。なお人類学では「父系／母系」という語は「出自集団」を説明する際に使われることから、「出自」についての説明を加えた。また、「親族」と「社会」との関係性をどのように捉えるかを示すために、「社会構造」等の説明もおこなった。以下概要を記す。

● 「社会」

人は相手の社会的な**地位 (status)**を参照しつつ相互作用するが、相互作用の際にはそうした地位に期待される何等かの**役割 (role)**、その地位にふさわしいとされる一連の権利と義務が共有されたり調整されたりする。この地位は人々が生まれながらにもつ性質を規定要因とする「**生得的地位 (ascribed status)**」と、人々の努力などの結果として獲得される「**獲得的地位 (achieved status)**」に大別され、親族関係は主に前者に位置付けられる。また「母と子」の関係のように異なる地位は相互に関係しており、こうした役割を伴う地位のまとまりを描くことは、秩序化されパターン化された社会的相互作用の基盤、もしくは**社会構造 (social structure)**を規定する持続的な社会関係を明らかにする第一歩となる。

しかし社会構造は単に相互に関係づけられた個人に付与された地位や役割に収斂するものではない。多くの社会では、特定の地位のセットをジェンダー、家族、リネージ、クラン、職業、政治的もしくは宗教的な所属といった観点から定められる特定の社会集団に正式に結びつけているため、それらも分析する必要がある。

なお「社会構造」は、互いに関係する社会的地位・位置の配置を表す語として使用されるいっぽう、「**社会組織 (social organization)**」は、人々が互いに関係しながら生活している場合に、相互作用をととして立ち現れる相互に関連した役割の関係性を表す語として使われる。

● 親族関係 (kinship)

親族関係という語は、**配偶 (mating)**、**出生 (birth)**、**世話 (nurturance)**という人間に普遍的な事象を基に構築された社会組織の多様な体系を示すものとして使われる。親族関係の結びつきは単なる生物学的・遺伝学的な人の再生産を直接的に反映しているわけではない。配偶、出生、世話という行為・経験は普遍的な形が決まっているわけでない曖昧なものであるため、文化的に構築された親族体系は、選択的に特定の側面に注目し他を切り捨てることで曖昧さを排除しようとする。すなわち親族体系は人間の再生産の特定の側面を強調することによって、いかに人間が幼児から社会的に成熟した存在に発達するかを規定するものであり、人についての文化的な見方を作り出す。

● 出自 (descent)

出生 (birth) と世話 (nurturance) に基づいて文化的に規定された関係を表す語。血縁のように出生によって繋がった「血族 (consanguineal kin)」を含むが、出自集団は養子縁組 (adoption) された人も含む。養子縁組による親族の結びつきは出生によるものと同等に強固であり、養子と養家につくりだされる「血肉の関係」は世話の見地から説明される。親子の絆によって作り出される出自関係は時間的深みをとめない、出自様式を創出する方法は2つに大別される。一つ目は母親と父親の両方を通じて人々が結びつく双系出自であり、二つ目は母親か父親どちらかを辿る系譜で人々が結びつく単系出自である。

● 単系出自と母系 (matrilineal) /父系 (patrilineal)

単系出自集団は世界各地で広くみられ、単系出自のうち 父親 (もしくは男性親族) を通じた結びつきに基づくものを**父系 patrilineal** (/agnatic)、母親 (もしくは女性親族) を通じた結びつきに基づくものを**母系 matrilineal** (/uterine) という。

なお「父系」や「母系」は男性のみ／女性のみが属するという意味ではなく、メンバーシップが付与される原理を示す。つまり父系社会では、女性も男性も父親に由来する父方の系統 (patrilineage) に属し、母系社会では女性も男性も母親に由来する母方の系統 (matrilineage) に属す。単系出自集団のメンバーシップは明白であり、個人はただ一つのリネージにしか属さない。なお母系社会 (matrilineage) は母権制 (matriarchy 女性が治める社会) を意味するのではなく、しばしば同一の母をもつ兄弟がリネージの利権を管理する力をもつ。

● 親族名称 (kinship terminology)

人は自らが親族と認識する人にたいして特別な呼称を使い、こうした語彙を親族名称という。北米では母親の親友を「aunt」と呼ぶこともあるが、以前はこのような親族関係を「擬制的親族 (fictive kin)」として「公式の親族体系」から区別することがあった。しかし最近の多くの研究は親族関係性の柔軟さを示しており、多くの人類学者は「実際の (real)」親族か「擬制の (fictive)」親族かという区別は歪曲だとみなすようになっている。

なお親族名称体系を手掛かりとすることで、親族集団の境界や集団内の区分、そして各々のメンバーに割り当てられた権利と義務の構造の輪郭を描くことができる。親族名称を体系づける際の基準を、一般的なものから示すと以下の通りとなる。

- ①世代 (generation)：その親族の世代に基づいて名称を使い分ける
- ②ジェンダー (gender)：その親族のジェンダーによって名称を使い分ける
- ③姻戚関係：婚姻／結婚を通じた関係である相手を区別する
- ④傍系性 (collaterality)：直接的な関係と傍系の関係にある人を区別する
- ⑤日本という家のような区別 (bifurcation)：母親側の親族と父親側の親族を区別する
- ⑥相対年齢：エゴより年長か年少かという相対的年齢によって異なる名称を使う
- ⑦その人と相手を結び付ける親族のジェンダー：傍系性と関係するが、その人との関係をつなぐ人のジェンダーによって交差親族 (多くの場合イトコ) と並行親族 (多くの場合イトコ) が区別される。

文献：Robert H. Lavenda, Emily A. Schultz. 2020. *Core Concepts in Cultural Anthropology*. Oxford University Press.

レビューに関する質疑応答：

- 霊長類学では「ペア（雄 1 頭と雌 1 頭＋コドモ）」という言葉を使用するが、人類学ではペアという言葉は使用するか
→文化人類学の分野ではペアという言葉は使用しない。結婚相手が一人に限られる文化もあれば、複数の相手との結婚を認められている文化もあることから、「パートナー」という言葉が使用されている。
- レジュメでは「配偶、出生、世話というものは曖昧な経験であるため、文化的に構築された親族関係は特定の側面に選択的に注目し他を切り捨てることで曖昧さを排除しようとする」とあるが、「曖昧な経験」とはなにか。
→曖昧さの事例として、以下があげられる。
 - 1) 配偶：相手を配偶関係にあると考えても、相手に他のパートナーがいる可能性がある。
 - 2) 出生：親が誰かはっきりしない場合がある。
 - 3) 世話：子が常に産みの親に育てられるわけではない。

研究発表の要旨：

「マレーシア半島部クアラ・コにおけるバテットの「養子」の実態：親族関係にかんする予備的考察」

0. はじめに

発表ではマレーシア半島部に暮らすバテットの「養子」実践から、彼らの親族関係や社会の在り方について考察した。以下、当日の議論を踏まえた考察を加える形で概要を記す。

これまで人類学では、養子縁組は財産や社会的地位の相続という観点から議論されることが主であった。しかし近年では、養子との世話を通じた親子関係は単なる相続以上の意味を関係者に生じさせることが指摘されている。また養子や子どもの育成は、社会性 (sociality) と人間性 (personhood) にたいする見解と関連することも論じられており、北米における過去 50 年間の養子は、子をもたないカップルによる「普通の」家族になりたいという感情的充足と関係していることも明らかになっている (Howell 2009)。

狩猟採集民は基本的には相続されるような財や社会的地位をもたないが、イヌイトのような集団では養子実践がみられ、それは親族関係を強化する機能があると論じられてきた。いっぽうより頻繁に移動する遊動生活をおくる集団の場合は、とくに「養子」について際立って議論されることはなく、これは彼らの親族関係の構築様式とも関係すると考えられる。発表で取り上げるバテットも後者にあたるが、調査期間中に「養子」をとる夫婦が数家族みら

れた。これについて考えることで彼らの親族関係や社会的背景に迫ってみたい。

1. 親族関係

対象としたのは半島マレーシアクランタン州のクアラ・コ村のバテッである。人口は約 200 人で 3 カ所ほどの拠点に分かれて暮らすが、拠点メンバーの構成は流動的である。またバテッは新たに出会った相手（バテッ）と近しくなる際に、相手と自分の親族関係の繋がりを確認するかそれを拡張させるように社会関係を築く。そして同じキャンプにいる人と食物のシェアリングを行い、子どもの世話は両親だけでなくそうした人もかかわる。いっぽう婚姻については、オジやオバとの婚姻が禁止されている以外に特に決まりはなく、イトコとの婚姻も可能である。このように相手を積極的に自分の親族に含め入れる形で築かれる社会関係は、彼らの離合集散性と関係すると考えられてきた。

彼らの社会関係は家族関係を基盤とし、これは彼らの呼称法に表れている。子どもの頃は生まれ名（クンモ・アサル）で皆から呼び捨てにされるが、そうした名で大人を呼び捨てにするのは非常に失礼なこととされる。そのため大人に対しては「誰々の母」などという大人の名（クンモ・プヌワ）、すなわちテクノニミーを用いる。子をもつ父親や母親であることは大人の証として重要とされるが、身体的理由により妊娠できない人が存在することも認識されており、そうした状態を表す「マノール」という表現もある。さらに 1970 年代後半～80 年代初頭生まれの男性には不妊の人が数名おり、これについては医師からも告げられた幼い頃の感染症の影響として認識が共有されている。

2. 「養子」実践

バテッ語に「養子」という語は存在せず、生まれた子をやり取りする/した際は単に「子を持っていった/持ってきた（ボッ アワ）」と表現する。親と死別した場合を除くと、養子となる子どもは命名される以前、生後 1 年以内にやり取りされる。なおこうした養子は特定の性別に限定されることはない。2005 年～2018 年のクアラ・コ集団内における養子は把握しているだけで 4 人であり、その他誕生後の子を病院の看護師にあげたという事例があった。

4 組について受入夫婦と引き渡し側の夫婦（又は母親）の関係を分析したところ、両者に兄弟姉妹といった近しい親族関係はみられなかった。しかし 1 つの事例は、引き渡し側の夫が子どもの世話を放棄したために妻のオバが引き取って育てたというものであった。残り 3 事例は「子どもが欲しい」という理由で、子をもたない夫婦が養子を迎えている。これらの受け入れ夫婦は 20 代～30 代で子どもが一人もおらず、渡す側の夫婦には既に子どもが 3 人以上いる点が共通する。なおすべての事例において受け入れ夫婦も周りの人々も、受け入れ夫婦が子の生物学的両親でないことを隠すことはなく、本人の前でそれを話題にすることも多い。

3. まとめと考察

「子どもが欲しい」という理由で養子をもらい受けた 3 組の夫婦は、子を一人ももたずに一定の期間を過ごしてきた。彼らは既にテクノニミーで呼ばれてもおかしくない年齢に達

しているが、世話をする子どもがいないため、架空の子どもの名前をもとにテクノニミー式のニックネームをつくって使用してきた。また日々の生活においても、大人は子どもを連れて水浴びに行くなど多くの時間を子どもの世話に充てるが彼らにはそれがなく、姉妹の子の世話をしたりしていた。

現代日本のような社会では、人は生得的地位としての親族関係だけでなく、獲得的地位としての職業や趣味をつうじて様々な相互作用を行って生活する。しかしバテツの社会では父や母という役割と地位、そしてそれを拡大した親族関係を前提に互いの接し方を調整する。子どもの世話をし世話を側にしきちんと位置付けられることが、彼らにとっての「普通」の大人の姿である。3組の夫婦が子を欲しがった背景にはそうした社会的背景がある。またいっぽう子を渡す側の夫婦には既に世話をする子が複数いるため、新たに生まれる子を受け渡しても、誰かの親であるという地位に変化はなく子育ての負担を減らすことにもつながる。こうしたことが彼らの「養子」に関係すると考えられる。

オバが姪の子をもらい受けた事例は、オバと姪の関係の強さを示す。子を引き渡した夫婦には既に子どもがいたが、夫は「養子」となった子は自分の子でないと世話を放棄した。妻の母が子を引き取ることも可能ではあるが、彼女は娘の夫の「クナア（義父母）」であり、彼が積極的に食料を分け生活を助ける親族的地位に位置する。そうした立場の彼女が引き取ると、婚姻によって生じたクナア（義父母）-ムンサウ（義理の子）という親族関係に何等かの軋轢が生じる。そうしたなか、母に次いで近い親戚であるブ（オバ）が子を引き取って育てることになったのである。なおこの夫婦は自分たちの子どもだけでなく妻の親戚の子の面倒もみて暮らす。このことから夫が子育てを放棄した理由が、単に自分がその子の生物学的親でないと感じたためでないことが明らかであり、妻にたいする嫉妬のような感情も関係していたと考えられる。

なお、レビュー・研究発表と議論をとおして霊長類学と人類学の協働研究について考えたこととして3点が挙げられる。1点目はニホンザルの社会では順位が継承されるということについてである。これは非常に興味深いと感じ、階層性があり地位が生得的に継承される人間社会と比較すると、それぞれの特徴がより鮮明になるのではと考えた。2点目も世代を超えた継承についてであり、サルにみられる行動圏の継承についても、バテツのように遊動生活を送ってきた集団の利用圏との比較が可能と考えた。バテツの場合はある程度の決まった利用圏があり（排他性はない）、多少のメンバーの入れ替わりはありながらもそれが世代を通じて継承される。そして3点目は発表に関連するものであり、サルの場合も必ずしも生物学的に近親でなくとも近くにいるサルが子の世話をすることがあるというコメントから、より踏み込んだ学際的議論が可能だと考えた。「親族」のようにそれぞれが同じ表現を用いている場合に、その能記（表記）に縛られることなく、その語の背後にある視点を柔軟に検討することが重要だと認識した。

文献：Howell, Signe. 2009. Adaption of the Unrelated Children: Some Challenges to the

Anthropological Study of Kinship. *Annual Review of Anthropology* 39: 149- 66.

研究発表に関する質疑応答：

- 養子をやりとりする夫婦間に親族関係などのつながりはあるのか。
→調査を実施した3つの拠点は親族関係の表を作成すると5世代ほどで皆つながる。
集落間での交流もみられ、雨季になると洪水を避けるため、同じ場所に集まることがある。また、若い男性は集落間をよく移動する。
- 他の狩猟採集民の事例も含め、一般的に狩猟採集民では養子の事例がみられないか、希少だと、これまでの研究は指摘してきたのか。
→近年、イヌイトでは老後の世話をしてもらうため、独居老人が養子をとる。
→狩猟採集民のハッザにも「養子」という表現はない。しかし、子どもが他民族の家に滞在してそこから学校に通うというようなことがみられる。
→狩猟採集民のバカでは、バカ語で「養子」という言葉はない。ただ、生物学的に父母ではない父母と共に過ごすことはある。
- オラン・アスリにおける「配偶」の実態について少し説明してほしい。
→バテツの場合は、そのとき共にいる・一緒に寝ることが結婚の状態となる。結婚の制度や結婚式はない。離婚したい場合には、妻または夫がどこかに逃げる。「共に寝なくなる」ということが「結婚ではなくなる」ということになる。
- バテツの呼称はかなり密な親族関係に依拠していたが、親族外の社会関係もあるのか。自分と相手の関係が遠くてわからない場合、相手をどのように呼ぶのか。
→無理やり親族関係をみつけようとするか、拡大的に親族名称を使う。さらにテクノニミーで呼び合うことも親族関係を基盤とした社会に位置付けることと関係するとみられる。調査者自身（河合文）も「サラ」という子供がいる母親としてバテツの社会に位置づけられた。

3-3) 人類学：結婚、夫婦、家族

(田所聖志)

レビューの要旨：

「結婚、夫婦、家族」

今回の文化人類学の基礎概念のレビューでは、親族、結婚に関連する概念を取り上げた。本研究会では、文化人類学の基礎的な概念を学ぶための教科書として下記の文献を共同購入している。

Lavenda, Robert H. and Schultz, Emily A. 2020 Core concepts in cultural anthropology, 7th ed. Oxford University Press.

そこで、今回紹介する基礎概念の説明では、上記の文献における関連箇所の説明を敷衍することとした。前半で発表した河合文氏と申し合わせ、上記文献の親族、結婚と関わる第 7 章 (Chapter 7. Relatedness: Kinship, Marriage, Family, and Friendship) の項目を手分けして取り上げた。発表者が取り上げた項目は、具体的には下記の通りである。

7.6 What is Marriage?

7.7 Whom to Marry and Where to Live

7.8 How many spouses?

7.9 Marriage as Alliance

7.11 Divorce

以下、簡潔に要点を述べる。

7.6 What is Marriage?

結婚の定義は下記のように紹介されている。

“a man and a woman, transforms the status of the partners, and stipulates the degree of sexual access the married partners may have to each other, ranging from exclusive to preferential. Marriage also establishes the legitimacy of children born to the wife and creates relationships between the kin of the partners.” (p. 103)

この定義では、結婚は夫婦間の性関係を正当化するのみならず、子の合法的な地位や夫婦それぞれの親族のあいだの関係をつくるものであるとしている。すなわち、結婚は、広い意味での法的な関係をつくるという側面があると指摘した。この点は、社会生物学的な理解と結びつきの強い霊長類学の mating という概念とは大きく異なる点である。

結婚が法的な関係をつくるものであることから、以下の項目もすべて、多様な文化や社会でみられる結婚に関わる規則について説明している。

7.7 Whom to Marry and Where to Live

本項では、結婚相手は誰がよいのかについての規則、結婚後はどこに住むことになっているのかについての規則の二点について述べられている。

前者については、exogamy (外婚)、endogamy (内婚) という概念を簡潔に紹介した (p. 104)。後者については、下記の概念について簡潔に紹介した (p. 105)。

- post marital residence
- neolocal residence, bilocal residence (few)
- patrilocal residence (virilocal residence),
- matrilineal residence (uxorilocal residence),
- avunculocal residence

7.8 How many spouses?

本項では、結婚相手の人数に関する規則について述べられている。結婚相手が一人に限られる文化もあれば、複数の相手との結婚を認めている文化もあることから、今回扱った教科書では、married couples というよく見られる表現よりも、married partners と表現している。

文化人類学では、結婚相手の数に応じて下記のような分類がなされている。

- ・ monogamy (単婚) (p. 105)
- ・ polygamy (複婚), plural marriage (複婚) (p. 106)
- ・ polygyny (一夫多妻婚) : a man may be married to more than one woman at a time.
- ・ polyandry (一妻多夫婚) : a woman is married to more than one man at a time. (きわめて希)。

7.9 Marriage as Alliance

本項では、結婚の際になされる贈与について、特に bridewealth と dowry の違いを軸に述べられている。それぞれは下記のように説明されている。

- ・ bridewealth (婚資) : certain symbolically important goods that are transferred from the immediate family of the groom (or his lineage) to the family of the bride (or her lineage) on the occasion of their marriage. (pp. 106-107)
- ・ dowry (持参財) : typically a transfer of family wealth, usually from parents to their daughter, at the time of her marriage.

7.11 Divorce

本項では、divorce (離婚) がどの文化や社会にも見られること、ただし、そのきっかけとなる事柄は文化や社会によって様々であると述べられている。(p.110)

以上の内容と関連し、霊長類学と文化人類学の接合を目指す本研究会の趣旨に照らして気づいた疑問点は次の点である。結婚によって生じる夫婦間の性関係以外のさまざまなもの(集団関係、財産など)を文化人類学は考慮してきた。集団関係や財産といった事柄を、社会生物学の影響の強い霊長類学の視点と関連づけて組み入れようとする場合、その整理の仕方はどのようなものがありうるだろうか。

レビューに関する質疑応答：

- 「結婚」と「婚姻」を使い分けているか
→ 学生には「結婚」で統一させている。論文では「婚姻」の方を使用する。「結婚」の方がより口語的なものかもしれない。英語に訳すと「結婚」も「婚姻」も“Marriage”である。

- サルとは異なり、ヒトでは配偶関係があったとしても、ペアとして常に一緒に行動するわけではない。例えば、ヒトの「妻問婚」のような婚姻形式では、妻方に婚舎をおき、夫がその家に通う。昼間は夫婦別々で、居住を異にするのが普通である。
→今後議論していきたい。

研究発表の要旨：

「パプアニューギニア農耕民における天然ガス開発と結婚形態の変化」

【1. はじめに】

発表者は、現在、パプアニューギニアのヘラ州で 2009 年から始められた天然ガス資源開発によって開発地社会で生じた社会変化と開発地住民の受けた影響についての研究に取り組んでいる。その研究の中から、親族、結婚と関わる研究を紹介した。

発表で伝えたいメッセージの骨子は下記二点であった。

- ・現代において、グローバル経済に関連した短期的社会変動が結婚形態に影響を与える。
- ・霊長類学と文化人類学を繋ぐときに、短期的な変化が長期的な変化になる過程に注目する進化人類学の視点は参考になるかもしれないのではないか？

【2. 先行研究・問い】

これまでの研究でも、短期的な社会変動によって結婚形態が変わったという事例報告があった。そうしたもののなかで、地下資源開発によって引き起こされた短期的な社会変動が、親族や結婚の領域に影響を与えたことを報告する研究も見られる。例えば、Robinson は、インドネシアの南スラウェシの鉱山町において、多国籍企業の創業によって、農業から鉱業への産業の移行、外部からの労働者の流入などの社会変化によって、若者の間にロマンチッククラブ指向が強まり、既婚女性の中で職業を主婦と答える人が増えたという変化が見られるようになったという [中谷 2007: 32]。では、パプアニューギニアの天然ガス資源開発による社会変化は、親族や結婚の領域にどのような影響を与えているのだろうか。

【3. 調査地の背景：パプアニューギニアの天然ガス開発とフリ社会】

パプアニューギニアのヘラ州での天然ガス開発は、日本、中国、台湾への出荷契約に基づき、アメリカの石油メジャーの主導によって始められた。2008 年に始められ、2009 年～2013 年まで開発地において道路や飛行場、生産工場や労働者の宿泊施設などの建設工事が進められた。そして、2014 年 5 月に初めて出荷された。開発地住民との関連については、2009 年～2013 年の建設期間中、開発地住民はさまざまな単純労働者として雇用され、現金収入が急激に増えた。だが、各種施設などの建設が終了した 2014 年以後、彼らは解雇され、現金収入が失われた。短期間の間に、もともと自給自足の農耕民であった彼らは、急激な経済変化を経験した。このほか、雇用を求めて他地域からも多くの人々が来るなど、急激な人口流入が見られた。

こうした社会変化により、親族、結婚に関して、下記 2 点が見られたが、今回は (1) について報告した。

- (1) 結婚件数の増加。地域外の人々との結婚件数の増加。婚資の内容変化。
- (2) 利益配分の受け皿の単位＝土地保有集団の構成。政府の想定する集団の枠組みと地域の人々の慣習との齟齬。

調査の出発点としたのは、2015 年の調査時に、発表者がフリ社会で聞いた下記のような語りであった。この真偽について、調査村においてインタビュー調査を行い、回答結果を集計して分析した。

「開発が始まった後に大金を手にするようになったから、ここの人はみんな頭が狂ってしまった。多くの男が金を手にして、若い者も年寄りもみな女に手を出して結婚するようになった」。

【4. 結果：開発後にフリ社会で起きた変化】

調査の結果、下記の 4 点が明らかになった。(1) 結婚件数は、急上昇していた。(2) 地域社会の外部の人々との結婚件数が増えた。(3) 老人の結婚件数が急増したという証拠は得られなかった。(4) 婚資の内容が、もともとブタが使われていたが、建設開始後に現金を使う件数が増えた。そして、建設期間終了後に、再び婚資としてブタを使うようになる傾向が見られた。

【5. まとめ】

現在のところ、結婚件数の増加と婚資の内容の変化についての考察について、次のような方向を検討中である。天然ガス開発によって雇用が増えて住民の現金収入が増加した。これは地域社会の内部の現金の量の増加につながった。これによって生じた地域社会の内部でだぶついた現金のフローは、婚資という形で地域社会の内外へと開かれ、結果として、平準化へ向けた動きとなったのではないか。また、この点についての関心を、社会性の文化人類学／霊長類学の研究にどうつなげるかについて考えたとき、文化の変化の過程の解明に関心を寄せる現代的な文化進化論の考え方が参考になるかもしれないと示唆した。

文献：中谷文美 2007「国家が規定するジェンダー役割とローカルな実践——インドネシア」宇田川妙子・中谷文美（編）『ジェンダー人類学を読む』世界思想社、pp.20-46.

研究発表に関する質疑応答：

- 「大金を手にするようになったから、若い者も年寄りも女に手を出して結婚するようになった」という語りを紹介していたが、結婚することはあまりよいことではないと考えられているのか。
→結婚することを悪いこととは考えていない。ただ、「お金を手にしたから突然結婚というのは節操がないんじゃないか」という語りはあった。取り決めの結婚がよいとき

れているので、そのことを前提とした語りだったのではないか。

- 開発が始まり、結婚件数が増加したという話だったが、もともと結婚していた男性が離婚し、新たに結婚するということはあったのか。
→一夫多妻が認められている社会なので、離婚後新たに結婚というわけではなく、既婚男性の妻の数が増えた。また、未婚の若者や年配男性の初婚も増加した。
- もともと豚を現金で買う習慣はあったのか。
→現金と豚の交換レート相場はある。豚を用意できない場合、現金を用意することはあった。
- 婚資の豚は現金で購入するのか、それとも自分たちで育てるのか。
→婚資の豚は自分たちで育てて用意するのが基本である。昔は現金収入がほとんどなかったため、自力で豚を用意する必要があった。結婚した際に、子（息子）の結婚のために豚を飼いはじめる。しかし、最近豚が購入できるようになってきた。

4. 総合討論（議論のまとめ）

<世代を超えた資源や財産の継承について>

- 人類学の場合は世代を超えた財産や資源の流れを把握できるが、霊長類学ではそういうものがないので世代間の繋がりをどのように把握するのか。
 - ・霊長類学では、「資源」という考え方がある。それは、オスにとっては繁殖相手となるメスであり、メスにとっては繁殖や生存にかかわるのは食物である。父系社会の出現の仮説の一つとして、血縁のオス同士で集団を形成して繁殖相手となるメスを他のオスから防衛するというものがある。メスの視点に立つと、行動圏内の食物資源をどのように防衛するかということが、社会組織を決定する要因になると考えられているし、また世代間で同じような行動圏を持つことも、食物資源やその分布に関する知識の伝達と考えられるのではないだろうか。
 - ・property（所有物・財）というものを、認知能力や身体的能力といった点にまで拡張して考えると進化的な議論につながるのではないか。
 - ・ニホンザルの群れにおける順位も資源として捉えることはできる。ニホンザルの場合、社会的な地位優劣関係は世代を超えて親から子に受け継がれていく。

<社会関係の把握方法について>

- 人類学ではその人が直接会ったことのない人も含めて社会と捉えるが、霊長類学の場合は、直接的接触のないような個体間の関係をどのように捉えるのか。
 - ・ニホンザルは凝集性が高いため、普段から同所的に一緒におり直接的な交渉を繰り返している。
 - ・チンパンジーの場合は凝集性の低い離合集散と言われる社会組織を持ち、同所的に一緒

にいるメンバー構成が流動的である。メス同士は互いに出会うことがまれな個体同士もいるが、少なくとも何度かの直接的な交渉の経験をもつ顔見知りだと考えらえる。そのため、久しぶりに会った個体どうしの挨拶は激しくなったりする。また、パントフートという遠くまで届く声から、その場に一緒にいない相手であっても、それが誰なのかを認識している可能性もある。

- チンパンジーの場合はアルファオスへの他の個体の接近などの記録を積み上げていくことで、集団の輪郭のようなものが想定されるのだろうか。
- ・アルファオスとの関係に限定されるものではないと思う。チンパンジーを観察する際には観察者は高いところに登ってチンパンジーの声を確認してからチンパンジーを探すことが多い。そしてアルファオスを含むパーティーを観察することが多いので、どうしてもそのアルファオスの記述が多くなる。

(以上)